

# ある日の先生と子供

小川未明

青空文庫



それは、寒い日でありました。指のさきも、鼻の頭も、赤くなるような寒い日でありました。吉雄は、いつものように、朝早くから起きました。

「お母さん、寒い日ですね。」と、ごあいさつをして震えています。

「火鉢に、火がとつてあるから、おあんなさい。」と、お母さんは、もう、朝のご飯の支度をしながらいわれました。

吉雄は、火鉢の前について、すわつて手を暖めました。家の外には、風が吹いていました。そして雪の上は凍っていました。

「いま、熱いお汁でご飯を食べると、体があたたかくなりますよ

。「と、お母<sup>かあ</sup>さんは、いわれました。

そのうちに、ご飯<sup>はん</sup>になつて、吉雄<sup>よしお</sup>は、お膳<sup>ぜん</sup>に向<sup>む</sup>かい、あたたかなご飯<sup>はん</sup>とお汁<sup>しる</sup>で、朝飯<sup>あさはん</sup>を食<sup>た</sup>べたのであります。

「一番<sup>ばんちや</sup>茶<sup>ちや</sup>がよく出<sup>で</sup>たから、熱<sup>あつ</sup>いお茶<sup>ちや</sup>を飲<sup>の</sup>んでいらつしやい。体<sup>からだ</sup>が、あたたかになるから。」と、お母<sup>かあ</sup>さんは、吉雄<sup>よしお</sup>の、ご飯<sup>はん</sup>が終<sup>お</sup>わるころにいわれました。

吉雄<sup>よしお</sup>は、お母<sup>かあ</sup>さんのいわれたように、いたしました。すると、ちやうど、汽車<sup>きしや</sup>の汽罐車<sup>きかんしや</sup>に石炭<sup>せきたん</sup>をいれたように、体<sup>からだ</sup>じゆうがあたたまつて、急<sup>きゆう</sup>に元氣<sup>げんき</sup>が<sup>で</sup>出てきたのであります。

吉雄<sup>よしお</sup>は、学校<sup>がっこう</sup>へゆく前<sup>まえ</sup>には、かならず、かわいがつて飼<sup>か</sup>つておいたやまがらに、餌<sup>えさ</sup>をやり、水<sup>みず</sup>をやることを怠<sup>おこた</sup>りませんでした。

夜の<sup>よる</sup>中<sup>うち</sup>は、寒<sup>さむ</sup>いので、毎<sup>まい</sup>晩<sup>ばん</sup>、やまがらのかごには、上<sup>う</sup>からふ  
 ろしきをかけてやりました。そして、学<sup>が</sup>校<sup>っこう</sup>へゆく時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>に、その  
 ふろしきを取<sup>と</sup>ってやっただけです。

その日<sup>ひ</sup>も、吉<sup>よし</sup>雄<sup>お</sup>は、いつものごとくふろしきを除<sup>の</sup>けて、かごを  
 出<sup>だ</sup>してやりました。そして、餌<sup>え</sup>をやり、水<sup>み</sup>を換<sup>か</sup>えてやってから、  
 鳥<sup>とり</sup>かごを、戸<sup>と</sup>口<sup>ぐち</sup>の柱<sup>はしら</sup>にかけてやりました。

太<sup>たい</sup>陽<sup>よう</sup>が、いちばん早<sup>はや</sup>く、ここにかけてある鳥<sup>とり</sup>かごにさしたか  
 らであります。けれども、あまり寒<sup>さむ</sup>いので、鳥<sup>とり</sup>は、すくんで、体<sup>からだ</sup>  
 をふくらましていました。やがて、太<sup>たい</sup>陽<sup>よう</sup>が、かごの上<sup>う</sup>をさす時<sup>じ</sup>  
 分<sup>ぶん</sup>には、元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>を出<sup>だ</sup>して、あちらに止<sup>と</sup>まり、こちらに止<sup>と</sup>まって、そ  
 して、もんどり打<sup>う</sup>ってよくさえずるでありましようが、いまは、

そんなようすも見られませんでした。

しかし、鳥がそうする時分は、吉雄は、学校へ行ってしまつて、教室には行って、先生から、お修身や、算術を教わっているころなのでありました。

どこか、遠いところで、風のうなる音が聞こえていました。そして、風が、すさまじく、すぎの木の頂を吹いています。その風は、また、かごの中のやまがらの頭の細い小さな毛をも波立てました。すると、やまがらは、ますますりのように、体をふくらませたのであります。

吉雄は、こうしている間に、餌ちよくの氷が凍ってしまったのを見ました。彼は、また新しい水を換えてやりました。凍つてし

まっては、やまがらが、水を飲むのに、困るだろうと思つたからです。

このとき、ふと、吉雄は、さつきお母さんがおいしいなされたことから、

「やまがらにも、あたたかなお湯をいれてやったら、体があたたまって、元気が出るだろう。」と、思いつきました。そこで、彼は、こんど餌ちよくの中に、お湯をいれてきてやりました。

「さあ、お湯をのむと、体があたたかになるよ。」と、吉雄は、やまがらに向かつていいました。

やまがらは、くびをかしげて、不思議そうに、餌ちよくから立ちのぼる湯気をながめていました。そして、吉雄が、そこに見て

いる間は、まだお湯をば飲みませんでした。

吉雄は、学校へゆくのが、おくれてはならないと思つて、やがて、かばんを肩にかけ、弁当を下げて出かけました。

吉雄は、学校へいつてから、友だちといろいろ話したときに、自分は今日くる前に、やまがらにお湯をやつてきたということを話しました。

すると、その友だちは、たまげた顔つきをして、

「君、やまがらはお湯など、飲ませると、死んでしまうぞ。」と  
いいました。

「だって、寒いじゃないか。お湯を飲むと、体があたたまっていいのだよ。」と、吉雄はいいました。



「お湯ゆなんかやれば死しんでしまう。君きみ、金魚きんぎよだって、お湯ゆの中なかへいれれば死しんでしまうだろう？」と、相手あいての少しょう年ねんは、いいました。

吉雄よしおは、なるほどと思おもいました。いくら寒さむくたって、金魚きんぎよをお湯ゆの中なかにいれることはできない。そのかわり、たとえ水みずがこおつても、金魚きんぎよは、生いきていることを、思おもつたのであります。

吉雄よしおは、たいへんなことを思おもいました。大だい事じにして、かわいがっていたやまがらを、自じ分ぶんの考かんえ違ちがいから、殺ころしてしまつては取とりかえしがつかないと思おもいました。けれど、どうしてもやまがらにお湯ゆをやつたことを、まだ、まつたく、悪わるいことをしたとは思おもわれませんでした。なんとなく、金魚きんぎよの場合ばあいとは、異ちがつ

たような気もして、疑われまされたので、先生に聞いてみることにいたしました。

吉雄は、一年生で、もうじき二年になるのです。彼は、先生せいせいのいなさるところへゆきました。

「先生、やまがらにお湯をやっても、死にませんか！  
と、吉雄は先生に聞きました。

「小鳥に、お湯なんかやるものはない。」と、受け持ちの先生はいわれました。

すると、このとき、受け持ちの先生の隣に、腰をかけていた、やさしそうな、やはり男の先生がありました。

吉雄は、その先生をなんと先生だか知りませんでした。

やさしそうな先生は吉雄の顔を見て、笑っていられました。そして、

「やまがらにお湯をやったんですか？ どうしてお湯をやったのです。」と聞かれました。

「あまり、寒いものですから、お湯を飲んで体があたたかになるように、やったのです。」と、吉雄はきまり悪げに答えました。

「おもしろい。」といって、やさしそうな先生は、受け持ちの先生と顔を合わして笑われました。吉雄には、どうしておもしろいのか、その意味がわかりませんでした。

「小鳥は、人間とちがって、お湯を飲んだからって、体があたたまるものではない。」と、受け持ちの先生はいわれました。

吉雄よしおは、どうして、人間にんげんと小鳥ことりとは、そう異ちがうのだろう。やはりその意味いみがわかりませんでした。

このとき、やさしそうな先生せんせいは、吉雄よしおの方ほうを向むいて、

「小鳥ことりは、山やまの中なかや、谷たにや、林はやしの間にすんでいるのです。そして、

どんな寒さむいときでも、外そとに眠ねむっています。生まれうれたときから、お

湯ゆを飲のむように育そだてられてはいません。ですから、寒さむいことも、

水みずを飲のむことも平気へいきです。寒さむい国くにに生うまれた小鳥ことりは、もう子供こどもの

時分じぶんから、寒さむさに慣なれています。あなたの心しんぱい配ばいなさるように、

寒さむさに驚おどろきはしません。」といわれました。

吉雄よしおは、なるほどと心こころに、うなずきました。

また、先生せんせいは、

「鳥や、獣は、火でものを焼いたり、水を沸かしたりすることは、知っていません。火でものを煮たり、水を沸かしたりするものは、人間ばかりでありますよ。」といわれました。

吉雄は、なにもかもよくわかったような気がしました。そして、先生たちのいなさる室から出ました。けれど、やはり頭の中に、心配がありました。

「やまがらが、いま時分湯を飲んで、舌を焼いてしまわないかと、彼は思いました。

もし、舌を焼いてしまったら、きつといまごろは、やまがらは、苦しんで、死んでしまったかもしれない。こう思うと、彼は、気が気でなかったのであります。

吉雄よしおは不安ふあんのうちに、修身しゅうしんの時間じかんを、一時間過じかんすごしました。

そして、休み時間やすじかんになつたときに、彼かれは、いつも、はつきりと先生んせいに、問とわれたことを答こたえる、小田おだに向むかつて、

「やまがらに、僕ぼくは、お湯ゆをやつたんだよ。」と、吉雄よしおはいいました。

「お湯ゆをやつたのかい。」と、小田おだは、目めを円まるくして問といました。

「やまがらが、お湯ゆを飲のんだら、舌したを焼やくだらうかね。」と、吉雄よしおは、小田おだにたずねました。

「お湯ゆを飲のめば、舌したを焼やくさ。」

「死ぬしだらうね？」

「ああ、死ぬしかもしれないよ。」

吉雄よしおは、もう、じつとしてゐることができませんでした。さつ

そく、教室きょうしつへはいつて、荷物にもつを持って帰り支度かえ じたくをしました。

「君きみ、家うちへ帰かえるの？」と、小田おだが、そばにきてたずねました。

「ああ、僕ぼく、家うちへ帰かえつて、やまがらにお湯ゆをやつたのを、水みずに換か

えてくるよ。しかし、もう飲のんでしまつたら、たいへんだね。」

と、吉雄よしおは、いいました。

すると、りこうそうな、目めのぱつちりした小田おだは、吉雄よしおを慰なぐさめ

るように、

「君きみ、もう飲のんでしまつたらしかたがない。そして、いま時分じぶんは、

お湯ゆは、こんなに寒さむいんだもの、水みずになつてゐるよ。帰かえつてもし

かたがないだろう。」といいました。

吉雄よしおは、なるほどと思おもいました。そして、帰かえるのをやめました。

この話はなしを、だれか受うけ持もちの先せん生せいに、したものがああります。

すると、先せん生せいは、みんなの前まえで、

「小田おだのいうことはよくわかる。頭あたまがいいからだ。そして、いつ

までもお湯ゆが、あつあついと思おもつたり、やまがらに、お湯ゆをやるよう

なものものは、頭あたまがよよくないからだ。」といいわれました。

このとき、吉雄よしおは、顔かおを真まつ赤かにして、どんなにか恥はずかしい

思おもいをしなしなければなりませせんでした。

しかし、受うけ持もちの先せん生せいのいいったことは、かならずしも正ただし

くなかつたことは、ずつと後のちになつてから、吉雄よしおが有ゆう名めいなすぐ

れた学がく者しやになつたのでわわかりました。







# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「童話」

1924（大正13）年1月

※表題は底本では、「ある日《ひ》の先生《せんせい》と子供《いづも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ある日の先生と子供

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>